

『源氏物語』 若菜上巻における明石入道の夢について

—— 漢籍に見られる夢解きの方法の視点から ——

On the Dream of Akashi-no-Nyudo in Wakana-no-Zyau, Tale of Genji

—— An Analysis by the Method of Oneiromancy
in Chinese Classic Works ——

呉 松 梅*

WU Songmei

(要旨)

「夢」は日本と中国の古典文学にしばしば登場する。『源氏物語』に登場する数々の夢の中で、明石の君が生まれる時に明石の入道の見た夢は、物語の展開に重要な役割を担っている。この夢に関して古注釈書『花鳥余情』は皇后と天皇の明石一族からの誕生を予言する夢だと解し、従来の論は殆どそれを踏まえている。ただし、一族の栄華を予告したこの夢を固く信じ、その実現に一生を賭けた明石の入道が、夢を解説した後、すぐに京を離れ明石に下り、二度と帰京しなかった行動にはまだ謎が残っている。本文によれば、夢を見た後、入道は「俗の方の書を見はべしにも、また内教の心を尋ねる中にも、夢を信ずべきこと多くはべし」とあって、つまり漢籍や仏典などいろんな書物を調べた後、夢を信じるべしと判断し、明石に下ったことになっているのである。果たして書物は入道に対していかなる示唆を与えたのであろうか。このような問題意識のもとに、明石という場所が夢の実現に結びつく必然性を探るため、本論では漢籍の夢の解き方を手がかりとして考察した。

歴史書、筆記、伝奇などの漢籍にたびたび登場する夢も、将来を予告するような重要な機能を果たしている。『史記』や『三国志』、『北齊書』などの歴史書、それに唐代の随筆集『朝野僉載』に記された幾つかの予告夢を分析すると、漢籍に多く見られる夢解きの方法に「漢字占い」があると分かる。特に予告夢の場合、この方法がより多く使われているようである。

同様の漢字の分解、組み合わせの方法は、古来より日本人にも熟知されており、平安時代の詩文に多々見られる。日本最古の例は『万葉集』に見られる。他に、『和漢朗詠集』などにも同じ手法が使われている。

漢籍では予告夢の解き方としてよく使われ、平安時代の日本の文人にも熟知されている漢字の分解や組み合わせを用いて『源氏物語』若菜上巻の明石入道の夢を解説するならば、一族の栄華の実現に関わる場所のヒントが明石入道の夢に読み取れよう。

一、問題の所在

『源氏物語』には多くの夢語りが見られる。その中には、物語の展開に重要な役割を担っているものも少なくない。特に明石一族の物語においては、明石の君が生まれる時の、明石の入道の見た夢は物語の基幹をなしていると言える。明石の君及び一族の栄華を予告したその夢を固く信

* 山東大学外国語学院副教授 (Associate Professor, School of Foreign Languages and Literature, Shandong University, China)

じ、その実現に一生を賭けた明石の入道は、孫娘の明石の女御が男宮を出産したと伝え聞いた後、大願成就を確信し、入山を決意する。その前に、入道は明石の君のもとに最後の手紙を送る。資料1にあるように、その手紙には明石の君が生まれる時に、入道の見た夢が記されていた。

【資料1】

わがおもと生まれたまはむとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべし。
(「若菜上」4-113p)¹

【資料2】

俗の方の書を見はべしにも、また内教の心を尋ぬる中にも、夢を信ずべきこと多くはべしかば、賤しき懐の中にも、かたじけなく思ひいたづきたてまつりしかど、力及ばぬ身に思うたまへかねてなむ、かかる道に赴きはべりにし。
(「若菜上」4-114p)

この夢に関して、古注釈書『花鳥余情』²は『過去現在因果経』の影響を指摘したうえで、以下のように解釈した。

- 1) 須弥の山にをきてはうへなき山なり
- 2) 右の手にささくるといふは女をは右につかさとはあかしのうへをいふなるへし
- 3) 山の左右より月日のさし出たるは月の中宮日は東宮にたとふれはあかしの上の御女中宮にたちて孫に東宮を生給へき瑞也
- 4) みづからは山のしたにかくれてその光にあたらぬといふはあかしの入道世をのかれて栄花をむさほる心なければかの御徳をはみさるを光にあたらぬとはいへり
- 5) 山をはひろき海にうかへをくとは東宮つゐに御位につき給て四海をたな心ににきり給ふへき心なり
- 6) わか身はちいさき舟にのりてにしをさして行は入道般若の舟にさほさし生死の海をわたりて西方極楽の岸にいたるへきにたとふ現当二世の願望成就して目出たき瑞夢也

つまり、『花鳥余情』では、『過去現在因果経』に出た「五奇特夢」の影響を指摘した上でこの夢は吉夢と解釈し、物語の筋にそくして、1)「須弥の山」は世界の中心の山で、2) それを「右の手に捧げた」とは、右は女、すなわち明石の君をさし、3)「山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす」の「月」は中宮、「日」は東宮の喩とされる。明石の君を介して、明石一族から皇后と天皇が誕生すると予言する夢であると解されている。また、4)「みづからは、山の下に隠れて、その光にあたらず」とは入道がその栄華の恩恵を受けずに遁世するという意味で、5)「山をば広き海に浮かべおきて」とは東宮が帝位につき四海を保つことを意味し、最後の6)「小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆく」とは、入道が生死の海を漕ぎ渡り西方極楽に往生することを意味すると解釈した³。「月」は中宮、「日」は東宮の喩と解釈したのは後述資料A『史記』外戚世家第十九「王太后の条」の影響もあると考えられよう。この夢に関する今ま

での解釈は殆ど以上の『花鳥余情』の解釈を踏まえている。ただし、資料2にあったように、夢を見た後、入道は「俗の方の書を見はべしにも、また内教の心を尋ねる中にも、夢を信ずべきこと多くはべし」と、つまり漢籍や仏典などいろんな書物を調べた後、夢を信じるべしと入道は判断した。そしてそれらの書物を根拠に彼なりに夢を解説したに違いないのである。孫娘の明石の女御に男御子が生まれたと聞いて長年の念願が叶ったと言って、入山を決意したという物語の展開から、『花鳥余情』の指摘以来、その夢は明石の君を介して、明石家から皇后と天皇が誕生するという、いわゆる予告夢であると解されてきた。その点は間違いないが、ただし夢を解説した後、すぐに京を離れ明石に下り、二度と帰京しなかった入道の行動にはまだ謎が残されていると思われる。具体的に言えば、なぜ入道は進んでより出世の可能性が高い近衛中将を捨てて受領の播磨の国司になり、その後明石の地に住みついたのか。以上の『花鳥余情』の解釈から答えが見当たらないこの謎を解くために、本論では、これまでの研究ではあまり注目されてこなかった「俗の方の書」である漢籍の夢の解き方を手がかりにして、入道の夢を考えてみたい。

二、明石入道物語における明石という場所

明石入道がはじめて『源氏物語』に登場するのは若紫の巻である。光源氏が瘡病の治療のために北山を訪れた時、従者の良清が地方の風光明媚な名所を紹介するついでに、明石の浦に住む変わり者の入道の話をしたのである。

【資料3】

大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、まじらひもせず、近衛の中将を棄てて申し賜はれりける司なれど、かの国の人にもすこし侮られて、「何の面目にてか、また都にもかえらん」と言ひて頭髮も下ろしはべりにけるを、すこし奥まりたる山住みもせで、さる海づらに出でゐたる、ひがひがしきやうなれど、げに、かの国のうちに、さも人の籠りぬべき所どころはありながら、深き里は人離れ心すごく、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かつは心をやれる住まひになんはべる。
(「若紫」1-202～203p)

「世のひがもの」と人々に呼ばれている明石入道は大臣の後裔で、出世もできたはずの人なのだが、自ら近衛中将を棄てて播磨守という受領になることを求めた。そして、そのまま明石に住み着いて入道になった。入道になったが、入道らしく深い山奥にこもって修行するというのではなく、明石の浦という海岸に豪華な邸宅を構えている。その理由を良清は「若き妻子の思ひわびぬべきにより」と推測する。その後、話題が入道の娘明石の君へと進展していく。大事に育てた一人娘の明石の君の婚姻に関して、明石の入道は特別な期待を寄せていた。

【資料4】

代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。「我が身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と、常に遺言し

おきてはべるなる。

(「若紫」1-202～203p)

つまり、入道は娘への代々の国司の求婚を拒絶し、都の高貴な貴族との縁談を望む。さらにその志が遂げられないなら海に入れと明石の君に遺言している。あまりにも身分不相応な望みなので、源氏の供人たちから「海龍王の後になるべきいつき女なり」、「心高き苦しや」(若紫巻)と揶揄される。実際、都から遠く離れ、明石に隠棲する入道の娘が都の高貴な貴族と結婚するというのは確かに白昼夢のような話である。

もともと明石入道の捨てた近衛中将は、従四位下相当の官職で、天皇の至近に侍することから、公卿への登竜門の一つで、若い貴公子の京官出世コースである。一方、播磨守は従五位上相当の地方官、つまり受領である。天皇の至近にいた方が明らかに出世する可能性が高いはずの人が自ら近衛中将を棄てて、国司を求め、そしてそのまま明石に住み着いて入道になったのは、当時の人から見てもまさに不可解な行動と思うしかないだろう。特に、娘を高貴な貴族と結婚させたいという不相応な縁談に固執する入道が、なぜ明石という土地を選んだのかは大きな謎である。それについて、阿部秋生氏は「受領の得分の大きさを狙って明石の入道は播磨守を望んだ」、「娘の養育費を得るために地方下向を決意して播磨国を自ら望んだものと見るべし」と述べ、つまり明石を選んだのは夢の実現にむけた蓄財のためと論じる⁴。確かに、播磨は大国であり、物質的利益には大変に恵まれた国で、その国司になるのは実益が大いに期待できるのであろう。「そこら遙かにいかめしう占めて造れるさま、さはいへど、国の司にてしおきけることなれば、残りの齡ゆたかに経べき心がまへも、二なくしたりけり。」(「若紫」1-203p)と良清が言ったように、明石の浦で贅沢な邸宅を構えたのも、国司として財産を貯えたからできたと考えてよかろう。ただし、日向一雅氏によって指摘されたように、明石と都との距離は大きな障壁であったはずで、明石の土地で蓄財して娘を大事に育てることができても、入道自身ふたたび帰京することを断念していただけない、娘を都の高貴な貴族と結婚させる願いは現実的には決定的に閉ざされたのであろう。「入道が明石に下って娘を養育したことが、なぜ明石の君の宿世の実現に近づくことになるのかは、現実的な判断としては謎としか言いようがないであろう。」⁵阿部秋生氏はまた「入道が、明石の浦に止まって、田舎の民となってしまったことは、誤算・矛盾のようであって、実は夢兆に基づいた確信から生まれた正確な計算に基づいていたのだと言わねばなるまい」⁶と指摘したが、では、なぜ自分の人生及び娘の人生まで夢の実現に賭けた入道は明石という土地に全てを賭けたのであろうか。「夢兆に基づいた確信から生まれた正確な計算」は一体どんな計算なのであろうか。彼の謎の行動の原点はやはり、娘の明石の君が生まれる時に見た夢の解釈にあるのではなかろうか。明石に下ってそこにいることが一族の栄華という夢の実現に至ることを、入道はその夢から解読していたという可能性が考えられる。その根拠は何かについて、以下「俗の方の書」の漢籍に見られる夢の解き方から検討してみる。

三、漢籍に見られる夢解きの方法

夢は歴史書、筆記、伝奇などの漢籍にもたびたび登場し、将来を予告するような重要な機能を果たしている。『史記』によると、入道の夢に似ている夢を、漢の武帝が生まれる時、母親の王

太后（当時は王美人）も見たという。

【資料A】

太子幸愛之，生三女一男。男方在身時，王美人夢日入其懷。以告太子，太子曰：「此貴徵也。」未生而孝文帝崩，孝景帝即位，王夫人生男。⁷

王美人は太子から寵愛され、女三人男一人を生んだ。男子を懐妊中、王美人は日が懐に入ってくる夢を見た。それを太子に告げると、太子は「これは生まれる子は身分が貴い予兆だ」と言った。生まれる前に孝文帝が亡くなり、太子が即位して孝景帝となる。そして王夫人から男の子が生まれたという記載であるが、生まれてきた男の子は後の漢の武帝である。日が帝の象徴という点では、入道の夢に対する『花鳥余情』以来の解釈に一致している。また『史記』に記されている漢の武帝の母親が見たこの夢は、日本の歴史書や日記文学に深く影響した。このような夢の象徴的意味を解釈する夢解きのほかに、漢籍に多く見られる夢解きの方法には、漢字占いというものがある。つまり、漢字の分解あるいは組み合わせによって夢を解釈する方法である。特に、予告夢の場合、この方法がより多く使われている。

【資料B】

三年春二月，以左右御使大夫丁固、孟仁為司徒、司空。〔一〕秋九月，皓出東閩，丁奉至合肥。（中略）

〔一〕吳書曰：初，固為尚書，夢松樹生其腹上，謂人曰：「松字十八公也，後十八歲，吾其為公乎！」卒如夢焉。（裴松之注『三国志』「吳志・孫皓伝」⁸）

『三国志』「吳志・孫皓伝」に左右御使大夫の丁固、孟仁を司徒、司空に任命するという記載がある。それに関して、裴松之の注では、張勃の『吳書』に記されている丁固の夢を注記した。丁固がまだ尚書であった時、腹上に松の木が生えている夢を見た。人に「松は十八公であり、十八年後、私は公になるということか」と言ったが、ついに夢の通りになった。

多少文字が違うが、同じことが『太平御覽』にも記載されている⁹。つまり、「松」の字を分解して「十八公」になるというところから、その夢は十八年後公卿の位につくという予兆だと解されている。

【資料C】

三月辛酉，又進封齊王。（中略）既為王、夢人以筆点己額，且以告館客王曇哲曰：「吾其退乎？」曇哲再拜賀曰：「王上加點，便成主字，乃當進也。」（『北齊書』「帝紀第四」「文宣帝紀」¹⁰）

文宣帝が帝になる前に、その年の三月に、齊王に封じられた。王になった後、人が筆で自分の額に点を打ったという夢を見た。それを食客の王曇哲に「私が退くということか」と尋ねると、曇哲がそれを聞いて再び拜礼して「王に点を打つと、主という字になる。もっと昇進すること、立身出世することの予兆である」と祝賀した。つまり、「王」の字に点を打つと、「主」という字

になるという漢字解が夢解きのポイントである。

【資料D】

薛琚嘗夢亮於山上持絲、以告亮、且占之曰：山上絲、幽也。君其為幽州乎。数月、亮出、為幽州刺史。
(『北齊書』「列伝十七」「張亮伝」¹¹⁾)

『北齊書』「列伝十七」「張亮伝」に次のような記載がある。薛琚は、嘗て亮が山においてシルク（絲）を持っている夢を見た。それを亮に伝え、さらに「山の上に絲、つまり幽になる。あなたは幽州を司ることになるか」と占った。数ヵ月後、亮が幽州の刺史に任命された。ここでも、「山」の上に「絲」を書くと「幽」という漢字になることが夢解きのポイントである。

【資料E】

洛州杜玄有牛一頭、玄甚憐之。夜夢見其牛有兩尾、以問占者李仙藥、曰：“牛字有兩尾、失字也。”
經數日、果失之。
(『朝野僉載』¹²⁾)

唐代の隨筆集『朝野僉載』に以下のように記されている。洛州の杜玄という人は牛を一頭持っているが、非常に可愛がっている。ある日の夜、その牛にしっぽが二本生えているのを夢見た。それを占い師の李仙藥に聞いたら、「牛」という字に二本のしっぽが付いたら「失」という字になると言われたが、数日後、予言どおり、その牛を失ったという。「牛」の字に二本のしっぽがあるなら「失」の字になるという漢字の謎解きの手法が使われたのは前の例と同じである。

【資料F】

江南有李令者、累任大邑、假秩至評事。世乱年老、无復宦情、築室於広陵法雲寺之西、為終焉之計。嘗夢束草加首、口銜一刀、兩手各持一刀、入水而行。意甚異之。俄而孫儒陷広陵、儒部将李琮屯兵於法雲寺。恒止李令家、父事令。及儒死、宣城裨将馬殷、劉建封輩、率衆南走。琮因強令俱行。及殷据湖南、琮為桂管觀察使。用令為荔浦令。則前夢之驗也。

(徐鉉『稽神録』¹³⁾、『太平広記』卷277夢三所収)

江南に李令という人がいて、大邑、假秩を歴任し評事の位についた。戦乱があり年も取って、官吏の道をやめようと、広陵法雲寺の西に家を建て、そこで余生を送ろうと思った。ある日、草を束にして頭にかけ、口に刀を一本くわえ、両手にそれぞれ刀を一本持って水に入っていくという夢を見た。普通ではないと思った。その後戦乱で転々としたが、最後に荔浦令に任命された。前に見た夢の通りになったという記載であるが、つまり、「草をたばにして頭にかける」のは草冠を意味し、「口に刀を一本くわえ、両手にそれぞれ刀を一本持つ」というのは上に一つ、下に二つという形で刀の字を重ねることで、つまり「荔」という字になり、それに「水に入っていく」というのは浦という字を連想させ、この夢は彼が将来荔浦の地方官になるのを予告する夢となる。結局夢の通り、李令が荔浦令になったというこの記述でも前と同じような夢解きの方法が見られる。しかも、「水に入っていく」のを「浦」の字に結びつけたのは、おそらく文字の意味からの

連想によるものであろう。

以上の説明から分かるように、漢籍では、夢の中に出てきたものを漢字にして組み合わせるという方法で夢を解くことが、少なからず記されてきた。すなわち、

- 資料B：松→十八公（十八年後に公卿になる）
- 資料C：王に点→主（国の主つまり帝になる）
- 資料D：山+絲→幽（幽州を司とることになる）
- 資料E：牛に二本のしっぽ→失（牛を失う予兆）
- 資料F：草を束にして頭にかけ、口で刀を一本くわえ、両手にそれぞれ刀を一本持つ→荔水
 に入って行く→浦（荔浦の地方官になるのを予告する）

資料B、C、D、E、Fでは、いずれも夢の中に出た情景に漢字を当て、漢字を分解したり、組み合わせたりして、謎を解いたのである。資料Bでは「松」は「十八公」に分解することから、夢を見た人が十八年後に公卿になる予兆だと、資料Cでは「王」に点を打つと「主」になることから、夢主が王から国の主つまり帝になる予告だと解釈された。資料Dでは、「山」の上に「絲」、 「幽」になることから夢主が幽州を司ることになると、資料Eでは、「牛」に二本の尻尾があると「失」という漢字になることから牛を失う予兆だと解かれた。資料Fでは、草を束にして頭にかけ、口で刀を一本くわえ、両手にそれぞれ刀を一本持つという夢の情景を草冠に刀三本、つまり「荔」という漢字、水に入って行くという情景を「浦」という漢字に当て、その夢は荔浦の地方官になる予告だったと悟った。しかも、以上の夢解きの予告は全部的中したとも記されている。それに、資料Dの『北齊書』「列伝十七」「張亮伝」及び資料F『稽神録』の例にあったように、その夢が将来に関わる場所を予告することもあるところに特に注目したい。

四、古代日本人の漢字遊び

『源氏物語』「葵」の巻に、「つれづれなるままに、ただこなたにて碁打ち、偏つぎなどしつづ、日を暮らしたまふ」（「葵」2-70p）とある。正妻葵の上を失った光源氏は傷心の日々を送った後、所在ない憂愁を抱きながら、ただ二条院で若紫と碁を打ち、偏つぎなどをして日を暮らしている。新編全集の頭注にも指摘されたように、二人のしている「偏つぎ」とは、漢字の偏や旁を使ってする漢字遊戯の一種で、そのやり方に関して、「漢字の旁に偏を付けて字を完成する遊戯、旁を隠して偏を見て文字を当てる遊戯、ある偏の字をいくつ知っているかを競う遊戯など、諸説あつて」¹⁴、まだ確定できないが、それは漢字の分解や組み合わせの方法を使った遊戯で、貴族の家で姫君の教育に使われていることには間違いない。ちなみに、「御念誦の暇々には、この君たちをもてあそび、やうやうおやすけたまへば、琴ならばし、碁打ち、偏つぎなどはかなき御遊びわざにつけても、心ばへどもを見たてまつりたまふに、姫君は、らうらうじく、深く重りかに見えたまふ」（「橋姫」5-121～122p）とあるように、同じ「偏つぎ」の遊戯を『源氏物語』の中で宇治の八の宮が二人の姫君ともしていた。つまり、漢籍にある漢字の分解、組み合わせの方法は、昔の日本人にも熟知されていたことで、『源氏物語』の中では遊戯として姫君の教育に使われているのである。

漢字の分解、組み合わせの方法が文学に使われた日本最古の例は『万葉集』¹⁵に見られる。以下、

小林祥次郎氏『日本のことば遊び』「恋という字を分析すれば—漢字の分解—」¹⁶を参考として、『万葉集』および『和漢朗詠集』における漢字分解の例を具体的に顧みたい。

『万葉集』巻九に、「仙人の形を詠む」歌がある。

【資料ア】

献忍壁皇子歌一首 [詠仙人形]

忍壁皇子に献る歌一首 [仙人の形を詠む]

常之倍尔 とこしへに (とこしへに)

夏冬往哉 夏冬行けや (なつふゆゆけや)

裘 裘 (かはごろも)

扇不放 扇放たぬ (あふきはなたぬ)

山住人 山に住む人 (やまにすむひと)

(2-395p)

結句の「山に住む人」について、岩波新大系の注釈に、「仙」の文字を分解した遊びかと指摘されている¹⁷。山に人偏をつけると、「仙」という漢字になるところから、仙人を詠んでいることを伝えているのであろう。

また、『万葉集』巻九の長歌に、

【資料イ】

天平元年己巳冬十二月歌一首 並短歌

天平元年己巳の冬十二月の歌一首 併せて短歌

虚蝉乃

うつせみの (うつせみの)

世人有者

世の人なれば (よのひとなれば)

大王之

大君の (おほきみの)

御命恐弥

命恐み (みことかしこみ)

磯城嶋能

磯城島の (しきしまの)

日本国乃

大和の国の (やまとのくにの)

石上

石上 (いそのかみ)

振里尔

布留の里に (ふるのさとに)

紐不解

紐解かず (ひもとかず)

丸寝乎為者

丸寝をすれば (まろねをすれば)

吾衣有

我が着たる (あがきたる)

服者奈礼奴

衣はなれぬ (ころもはなれぬ)

毎見

見るごとに (みるごとに)

恋者雖益

恋は増されど (こひはまされど)

色二山上復有山者

色に出でば (いろにいでは)

一可知美

人知りぬべみ (ひとしりぬべみ)

(後略)

(2-438p)

とある。下線部の「山上復有山」は、「山の上にまた山がある」ということになり、これを漢字で示せば「出」という字になる。そのため、「色二山上復有山者」は「色に出でば」というふうに読まれる。ここに中国六朝時代の詩集『玉台新詠』¹⁸の影響があることは、契沖『万葉代匠記』の指摘以来¹⁹、定説となっている。

そして、【資料B】の『三国志』の例にあったように、「十八公」で「松」を意味することは、日本の漢詩にも影響を与えている。『和漢朗詠集』 卷下・松・四二五に所収された源順の詩が以下のようにある。

【資料ウ】

十八公の榮は霜の後に露れ
 一千年の色は雪の中に深し 順
 十八公榮霜後露 一千年色雪中深 順²⁰

松の貞節が霜枯れの季節の後によりあらわれ、その千年も変わらないままの緑は雪の中でこそいっそう鮮やかに見えると詠む詩である。「十八公」で「松」を表すことの出典には、資料Bにあげた「丁固の夢」も指摘されている²¹。

また、同じような漢字の分解方法は小野篁の漢詩にも見られる。

【資料エ】

物色は自ら客の意を傷ましむるに堪へたり
 宜なり愁の字を將つて秋の心に作れること 野
 物色自堪傷客意 宜將愁字作秋心 野

(『和漢朗詠集』 卷上・秋興・二二四)²²

つまり、「愁」という字は「秋」と「心」とから成り立っているということである。「愁」の漢字のこのような分解方法もまた中国と日本の文人の使う常套手段である。

以上に紹介してきた、日本の奈良・平安時代における漢字解の事例について、分かりやすくまとめると、以下のようになる。

- 資料ア：人+山→仙
- 資料イ：山+山→出
- 資料ウ：十八公→松
- 資料エ：愁→秋+心

以上のように、『万葉集』の時代から、漢字の分解は文人によく使われる手段である。「松」を「十八公」に、「山上復有山」を「出」に、また「愁」を「秋心」に読むような漢籍の影響のほかにも、「仙」を「山に住む人」と字解のような方法も歌や詩にも多々見られるのである。『源氏物語』にも貴族の家の女子の教育に偏つぎのような漢字分解の遊戯も描かれている。要するに、漢籍の夢占いに使われた漢字の分解や組み合わせの方法は平安時代の文人にも知られ、使われていたのである。

五、結論

漢籍では予告夢の解き方としてよく使われ、平安時代の日本の文人にも熟知されている漢字の分解や組み合わせの方法で『源氏物語』若菜上巻の明石入道の夢を解説したら、どうなるであろう。「山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす」という情景を漢字に変換すれば、月と日が「明」になる。「山」について、『説文解字』²³「山」の条には「有石而高」（石有りて而して高し）と解釈しており、『説文解字』のこの解釈が『爾雅注疏』²⁴にも引用されている。資料B、C、D、E、Fの夢解きの方法を使って明石入道の夢を漢字に当ててみたら以下ようになる。

○ 日+月→明

山→石

つまり、資料Dと資料Fの予告夢と同じ、明石入道の夢にも一家の栄華を実現するのに関わる場所のヒントが隠されている可能性が高いと思われる。

前述のように、娘の都の高貴な人との婚姻に執着している入道はその志が遂げられないなら海に入れと常に娘に遺言していた。入道の遺言と全く同じような遺言を桐壺更衣の父按察大納言も残した。桐壺更衣は身分が低いながら桐壺帝の寵愛を一身に集め、そのため他の女御、更衣たちに憎まれ、周囲の迫害に堪えきれず世を去った。父親が亡くなり、格別の後見がないから、入内後の苦難は承知の上で、それでも宮仕えの道を選んだ経緯は、更衣が死んだ後、その母によって、「故大納言、いまはとなるまで、ただ、『この人の宮仕への本意、かならず遂げさせたまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、返す返す諫めおかれはべりしかば」（桐壺巻1-30p）と語り明かされる。自分が死んでも娘の宮仕えの宿願をきっと実現させよと父按察大納言が臨終に際して繰り返し遺言した。その遺言の実現に桐壺の更衣が命を捧げた。娘の婚姻に特別な期待を寄せ、似たような遺言を残した二人の関係は、須磨巻で源氏の須磨退去という噂を耳にした明石の入道によって語り明かされる。「故母御息所は、おのがをぢにものしたまひし按察大納言の御むすめなり」（須磨巻2-211p）と。つまり入道の父大臣と源氏の母桐壺更衣の父按察大納言とは兄弟であり、まさに同じ一族の人として、入道も桐壺更衣の父按察大納言も娘の一生を含めて、すべてを一族の復興に賭けたと言えよう。播磨守を任官された時の明石入道の行動に関して、阿部秋生が「かうした当時の実情を背景にして、明石入道のこの明石の浦における経営をみると、京にゐる公卿達の莊園経営とは、少しく趣を異にしてゐるやうだが、（略）海岸を占有することによって、船津としての権利をもつと共に、そこに倉をおいて背後地の農林物産を集積し、また海産物、即ち漁撈による収益や塩浜の権利も握ってゐたのであらう。（略）交易による収益もあったのであらう。かうした多角的経営を、国守として現任の当時から綿密に計画して実現してきた…（後略）」²⁵と述べ、明石入道の「一切の行動の底には（中略）名門の座を回復しようとする強烈な意欲が潜んでいる」と指摘した。秋山虔が「播磨前司、明石の入道」の中で、特に「明石の入道の資産形成」²⁶の節で上記引用箇所を引いて、積極的に阿部説を支持した。さらに日向一雅が「海に入りぬ」の遺言を「『家』の断絶の覚悟」を代償とした「名門の再興の執念」によるものと論じたように、入道の偏屈な行動はすべて娘によって家門の復興を達成させようという強い信念によるもので、明石の君が生まれる時見た予告の夢を信じ、その実現に自分と娘の一生を賭けていたのである。そのために、「俗の方の書」からも「内教の心」からも一生懸命夢

の解説の手がかりを探し、夢の予告を信じるべき記述を探した後に、「明石」に下ってそこで娘を養育することが夢の実現に近づくことになるかと判断したうえで後の行動を決めたと言えよう。また、明石の君たちと別れた時に、「命尽きぬと聞こしめすとも、後のこと思しいとなむな」（松風巻2-406p）と語り、つまり死後の葬儀や法事などをする必要がないと言いつけたのも、そして明石の女御が国の母になり、若宮が東宮になるという夢の確実な実現まで待たずに入山したのも、「みづからは、山の下に蔭に隠れて、その光にあたらず」という夢の予告を頑なに守ることが夢の実現の保証であるとの確信に由来すると考えられよう。

〔注〕

- ¹ 『源氏物語』の本文及び巻数、頁数は、小学館新編日本古典文学全集による。
- ² 『花鳥余情』源氏物語古注集成〈第1巻〉1978年4月 桜楓社 237~239p
- ³ 『花鳥余情』の夢解釈は注2のほか、西郷信綱『古代人と夢』平凡社選書(13)1972年5月16~29p、竹内正彦「明石入道の夢の図像——明石一族・前史への試論」『日本文学論究』国学院大学国語国文学会(第47冊)1988年3月、26~37p、森野正弘「明石入道の手紙」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』14若菜上(後半)至文堂2000年12月108~111pなどを参照した。
- ⁴ 阿部秋生「明石君の周囲」『源氏物語研究序説』東京大学出版会1959年4月734~764p
- ⁵ 日向一雅『源氏物語の主題——「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社1983年5月49~56p
- ⁶ 注4と同じ、762p
- ⁷ 漢代・司馬遷撰『史記』卷四十九 外戚世家第十九「王太后の条」、中華書局出版1959年9月
- ⁸ 「呉書」『三國志』中華書局1959年12月 第5冊1167p
- ⁹ 張勃呉録曰「丁固夢松樹生其腹上、人謂曰、松字十八公也、後十八年、其為公乎。」(『太平御覧』)
- ¹⁰ 唐・李百藥撰『北齊書』中華書局出版1972年11月 第1冊45p
- ¹¹ 注10と同じ、第2冊361p
- ¹² 唐・張鷟撰『朝野僉載』卷三、『唐五代筆記小説大観』所収、上海古籍出版社2003年3月36p
- ¹³ 徐鉉撰『稽神録』、『宋元筆記小説大観』所収、上海古籍出版社2001年12月
- ¹⁴ 「葵」2-70p頭注三
- ¹⁵ 『万葉集』の本文の引用及び巻数、頁数は、小学館新編日本古典文学全集による。
- ¹⁶ 小林祥次郎氏が「恋という字を分析すれば一漢

字の分解一」(『日本のことば遊び』勉強出版2004年8月259~282p)。本論で述べた『万葉集』と『和漢朗詠集』の例のほかに、氏が『古今集』(秋下・二四九)文屋康秀の歌に使われた「嵐」を「山風」に、『古今集』(冬・三三七)紀友則の歌にある「梅」を「木ごとに」(木+毎)に分解する例なども指摘した。

- ¹⁷ 『万葉集』岩波書店 新日本古典文学大系2—339~340p 注釈(1682)を参照。
- ¹⁸ 徐陵『玉台新詠』卷十「古絶句・藁砧今何在」に:「藁砧今何在?山上復有山。何当大刀頭?破鏡飛上天。」とある。藁砧は藁を打つ丸い石、丸い石を「砧」ともいい、夫と同音。夫は今どこにいるのかという問いに「山上復有山」と答え、つまり外に出ているという意味になる。
- ¹⁹ 『万葉集』岩波書店 新日本古典文学大系2—386~387p 注釈を参照。
- ²⁰ 『和漢朗詠集』卷下・松・四二五、小学館新編日本古典文学全集228p
- ²¹ 注19と同じ、228p頭注では『芸文類聚』卷八十八「松」に所引された張勃呉録の「丁固の夢」(内容は注9の『太平御覧』と同じ)が指摘された。
- ²² 『和漢朗詠集』卷上・秋興・二二四、小学館新編日本古典文学全集127p
- ²³ 後漢・許慎『説文解字』『中国古典名著百部』所収、九州出版社2001年2月526p
- ²⁴ 『爾雅注疏』「釈山第十一」、『十三經注疏』所収、北京大学出版社1999年12月208p
- ²⁵ 阿部秋生「播磨守」、注4と同じ、751~752p
- ²⁶ 秋山虔「播磨前司、明石の入道」秋山虔・木村正中・清水好子編『講座源氏物語の世界』第三巻、有斐閣、1981年2月288~290p

付記：本論は課題番号1FW09061「『源氏物語』研究」(山東大学)の成果である。